

ヘクソカズラの嘆き

あるとき「読んでみませんか？面白かったですよ」と友人から本を手渡されました。題名は「植物図鑑」。なんと直截的な名前でしょう。作者は「図書館戦争」や「阪急電車」などの著書を持つ有川浩。おそらく友人は

清水 正の

一里一尺

～自然をたずねて～ ④

ひどい名前の植物たち



私が植物に興味関心を持っていることから薦めてくれたのでしよう。内容はさておき、本の中で山野草の料理レシピまで出てくるという変わった小説でした。

この小説の出だしで書かれている植物がヘクソカズラです。いきなり名前が出てくるわけではありません。小説の主人公の一人は花の事を知らず、この花の名前も知りません。話が進行する中で気づくのです。この花の名前はインバクトの強さから、少し植物に興味のある人なら一度は聞き、覚えているでしょう。八月から九月にかけて、あちこちいたるところで花を咲かせてくれています。花を見ると可愛らしく、どうしてこんなひどい名前をつけられたのかが不思議です。小指の先ほどの大きさをした釣鐘状の花で、花弁の先は五つに別れて広がっています。筒状の内の方は紅色で、外がわの白を透か

して筒状の下部では薄いピンクに見えます。よく見るととても可愛くチャーミングな花です。なのになくして屁だけでなく

糞まで付けて呼ぶのでしよう。実はこの花は素敵な別称を持っています。「サオトメバナ（豆乙女花）」です。釣り鐘をスゲの傘に、その中の赤い色を茜だすきに見立て田植えをする早乙女に例えたのでしよう。もう一つ別称を持っています。「ヤイト（灸バナ）」です。これはこどもたちがこの花をとって、手の甲や腕にのせたりして、灸ごっこをしていたところからつけられた名前と言われています。いずれも日常の生活から名付けられたもので、この花が誰もが知っていたものであるとともに日常の中に野の花が自然に入っていた事が何



ヘクソカズラ

えます。

ではこの花が何故、ヘクソカズラと言うひどい名前が付き、しかもその名が先の別称よりも知れ渡るようになったのでしょうか。身近であったが故に手に取ることも多く、多くの人がこの花の持つ独特の臭気を感じ取ってしまったのです。なるほど葉や茎を傷つけたり、実を潰したりすると悪臭が漂います。あまりの悪臭に思わず屁や糞を思い、「へくそ」と言ってしまう、そのインパクトの強さに「早乙女」も「灸」も消し去られたと思えません。この臭気の原因はメルカプタンといわれる化学物質で、これはおならや便の臭いの原因物質でもあると言われています。

草と虫との知恵比べ

ここでまた疑問が湧きます。どうしてこんな悪臭をわざわざ出すのでしょうか？植物は持つて生まれた悲し

い性があります。移動したりして逃げる事が出来ないのです。どの植物も受粉のために虫たちに来て欲しいのですが、植物を餌としている虫たちも同時にやつて来ます。なんとしても食われることを避けることが生き残るために必要なのです。そのために植物たちはいろいろな方法を考え出しました。そのひとつが虫の嫌いな臭いを発すると言う事です。結果ベドロシドという化学物質を細胞内に作り、嚙つたりちぎつたりされて細胞が壊れると「メルカプタン」に変化するというしくみを作り出したのです。

しかし、ヘクソカズラが編み出した「生き残り戦略」も、それを打ち破り利用する昆虫が現れました。自然界は奇々怪々、食うか食われるかの世界です。ヘクソカズラヒゲナガアブラムシという虫は、なんと悪臭をものともせずヘクソカズラから汁

を吸い出し自らの体内に蓄えます。天敵であるテントウムシはこの臭いを嫌いヘクソカズラヒゲナガアブラムシを食べることはしません。ヘクソカズラヒゲナガアブラムシは独占的に食べられる植物を確保し、同時に天敵に襲われることもないという二つの利益を得たのです。これも「生き残り戦略」です。一つの植物から他の生き物へといろいろなものが見えてきます。似通った戦略を持ったものとしてジャコウアゲハとウマノスズクサ、アセビとヒヨウモンエダシヤクなどがあります。これこそ自然の観察の面白い所だと思えます。

ヘクソカズラの花をジックリ見るともわもわとして、すごく毛深いのです。その毛が花の内部にまで密生しています。蜂たちは蜜を吸う代わりに身体に花粉を付けて別の花に運んでくれて、花にとっては上客なのです。しかし蜜を求めてアリもやつ

昔の名前で出ています

てきますが、彼らは花粉を運んではくれません。いわば食い逃げ客です。そこで花の内部に毛を密生してアリの侵入を防いでいます。これも植物の「生き残り戦略」の一つです。小さな花たちがこれだけ工夫を凝らしている世界を持っているのは驚きです。



野原一面のオオイヌノフグリ



オオイヌノフグリの花の構造

やって来たといわれる帰化植物です。しかし今では、日本に古くからあったかのような大きな顔をして各地で見られます。しかし草の名は少し気の毒と言えます。オオイヌノフグリです。フグリとは古色蒼然とした名前、最近の若い方には何のことと思われるかもしれません。いわゆる陰囊です。この美しい花を見ても何でフグリなの？と思いますが、実を見るようになるほどわかります。在来種にイヌノフグリ（京都府絶滅危惧種）があります。花は二、三mmと実に小さく見逃しそうです。花の色はうつすらと赤味を帯びています。こちらの実はしっかりと丸い実がふたつ付いて本物そっくりのフグリです。これとよく似た花の大きなものが外国から来たのでオオイヌノフグリと命名したようです。オオイヌノフグリの実は本家みたいに丸くなくベタシコです。現在、本家のイヌノフグ



イヌノフグリの花



イヌノフグリの実

リはわが世の春を謳歌するオオイヌノフグリと違い稀少種です。しかし意外なところで時々出くわします。伏見の町の中で石積みの中からほんの数株ひょっこり顔を出しているのを見かけます。毎年無事かどうかを花の咲く時期に見に出かけます。そして今年もありました。ほっとしました。「来年も元気でいてくれよ」と声を掛けて、その場を離れました。

コバルトブルーの侵入者

オオイヌノフグリにも美しい別称があります。「青い瞳」です。しかしヘクソカズラと同じくインパクトの

強いオオイヌノフグリが圧倒的に呼称として使われています。「衝撃は美よりも強し」ですかね。別称の通り、この花はコバルトブルーの春の明るさですが、しさを表現したような花です。花弁には色の濃いブルーの筋が幾本か入り引き締めています。四つの花弁（下部では合体）の中心部には内側に湾曲した二本の雄しべと一本の雌しべが突き出しています。以前、私の友人がオオイヌノフグリの群生にしゃがみ込んで、しきりにシャッターを押していました。「何をとっているの？」と聞くと、雄しべの葯がわれて花粉が出てくる状態のものを探しているとのこと。それは両側にある濃いブルーの葯から白い花粉が出て、ブルーの一筋が残ри、長く突き出た雄しべがまるで「カニの目のように見える瞬間なんだ」と話してくれました。よく見ると確かにそんな感じです。観察もここまで

来れば一級だなど感心しました。

この花は一時期、一日花と発表されていましたが、疑問を持ち再度研究された結果、現在では開花は一三日とされています。そして花の開じる時刻には雄しべが雌しべに近づき自家受粉をします。その結果全ての花に実をつけることになります。虫による他家受粉が出来ないときの保険としてクロロシカ出来ない自家受粉も使うことで種の保存をはかっています。

どんどん増えるお仲間たち

よく似た種として真っ直ぐに茎が立ち葉腋には青い極小さな花をつけるタチイヌノフグリや比較的新しく外国から入ってきたフラサバソウがあります。これは葉や茎、萼などやたらと長い毛が生えています。花は三〜四mmほどの大きさがあります。これだけ変わった名前になっている

のは、長崎で発見したフランチェットとサバチエルという学者の名前を組み合わせたからです。最近京都にも増えてきたイヌ



毛深いフラサバソウ

ノフグリの仲間としてコゴメイヌノフグリというものがあります。名前の通り小さく白い花を咲かせます。私は一昨年植物園付近の鴨川河原や木幡池、中書島付近などで発見しました。これは東京の小石川植物園から逸出して、今や東京ばかりでなく他地方に広がったものです。外来種はこんな形でも広がっていくのですね。私の散歩道には五種が隣接して咲くところがあり、楽しみな観察スポットです。身近な花にも植物の不思議が沢山詰まっています。華やかな花ばかりでなく、こんな小さな花たちにも是非目をかけてやって下さい。